

吉田豊明著

『伝説の地方紙「石見タイムズ」』

——山陰の小都市浜田の

もうひとつの戦後史』

評者：吉田 健二

GHQ占領期に創刊をみた新聞は、既存紙に対して新興紙と呼ばれ、日本新聞協会編『日本新聞年鑑』（1947年版）によれば1946年10月の時点で180紙が発行、なお400社が政府に用紙の割当を申請していた。

島根県浜田市でも1946年7月1日に、かつて徳富蘇峰の国民新聞社やジャパントイムズ社の政治記者を務めた小島清友により『浜田新聞』が創刊された。この『浜田新聞』は翌47年7月1日に、清友の息子で、主筆の小島清文により『石見タイムズ』と改題され、事業も津和野、益田、江津、太田など石見地方一円に広げて、地方新興紙としては異例の1972年10月28日まで存続した。

本書は、民主主義日本の実現を希求して、地方紙の発行に夢と理想を託した小島清友・清文父子のジャーナリスト群像を中心に、清友・清文時代（1946—58年）の『石見タイムズ』12年の足跡を記録したものである。

先に本書の目次を紹介する。なお著者は1936（昭和11）年生まれ、浜田市で育ち早大を卒業して日本経済新聞社に入社した。のちワシントン特派員、編集局産業部長、日経B P社常務をへて先年退職された。

はじめに——「理想主義的小新聞」

序 清文とケーリ

I 創刊 昭和22～25年

II 発展期 昭和25～27年

III 編集長、清文の憂鬱 昭和27～30年

IV 社長、清友の終楽章 昭和30～33年

V 「石見タイムズ」以後の清文の軌跡
おわりに

※

近年、プランゲ文庫の公開や、有山輝雄ほか監修『占領期新興新聞集成』（日本新聞博物館所蔵、DVD版）の刊行もあって、新興紙メディアに対する関心が高まっている。

しかし新興紙に関する研究は、松本重治・長島又男らの『民報』（1945年12月1日創刊、のち『東京民報』と改題）や、加藤勘十・千葉雄次郎らの『中京新聞』（1946年8月1日創刊）などが事例としてあげられるが、地方新興紙については未開拓であった。

本書は、地方新興紙研究の先駆けをなすものである。第1に評価されることはバックナンバー（浜田市立図書館に所蔵）をたんねんに調査し、取材を重ね、証言内容や事実関係を考証して『石見タイムズ』の創刊、編集、経営についてその全容を明らかにしている。

ちなみに調査は1995年以来続けられ、この間における取材は、巻末に協力者の氏名が掲載されているが56名に及び、小島清文からは東京と浜田市で21回も取材を重ねて証言を得たという（「おわりに」）。本書は、新聞制作の現場に身をおく練達の記者としての著者の取材力、調査力のたまものといってよい。

さて『日刊スポーツ』や『サン写真新聞』などの専門紙を別にして、新興紙に共通する特徴の一つは、社説や論説記事を重視し、かつ政治的な主張をつよく打ち出す編集を行っていた

ことである。

たとえば『民報』は「民主国家の建設」を標榜し、旧指導者の戦争責任追及や、天皇制の問題では天皇を「実際政治の圏外」に置いて象徴天皇制として残す方向で論陣を張っていた（拙著『戦後改革期の政論新聞』文化書房博文社、2002年）。

住谷悦治・能勢克男らの『夕刊京都』（1946年5月12日創刊）も「文化国家の建設」を標榜し、人民戦線の結成や、新憲法を歓迎・啓蒙する特集記事を連載していた（法政大学大原社会問題研究所編『証言占領期の左翼メディア』御茶の水書房、2005年）。

『石見タイムズ』も当初はこれらと同じ政論紙の性格をもち、民主主義の課題と論点を掲げて世論喚起に努めていた。

たとえば改題前紙の『浜田新聞』は「市長に與ふ」と題する長文の社説を3回（第2～4号）にわたって連載し、浜田市の市政民主化を要求し、新憲法公布の前日、すなわち1946年11月2日付の第12号は新憲法制定の特集号として発行、社説「新憲法と吾等の覚悟」をもってこれを歓迎し、第1面を憲法制定関係の記事で埋め尽くしている。

『石見タイムズ』も、第1面の題字の真下に社説を掲載するなど論説記事を重視する編集方針を採った。社説のテーマも「新しき警察」（第50号）、「新警察制度」（57号）など警察民主化に関する提言や、清友の執筆と推察されるが社説「女性の解放」（第59号）や「婦人デーに寄せて」（109号）を掲載するなど、石見地方の婦人に対して自立と権利意識を促す論陣を張っていた。

他方で、石見タイムズ社は、自治・政治意識の昂揚のみならず、市政に対する参加と監視を促してもいた。一例として、1947年12月12日に浜田市で開催された「市会議員にものを聴く夕

べ」（第53号）をあげておきたい。

本書で特筆し、かつ評価されるのは「戦後の日本に草の根民主主義を根付かせたい」（5頁）、「日本の民主化を草の根（地方）から進めていきたい」（55頁）という、清友・清文父子の志と活動を紹介していることである。本書は、実は著者が「戦後の日本の民主化は、米国からのもらいものだけではない、という事実」（11頁）を『石見タイムズ』における二人の活動を通じてこれを明らかにするため上梓したものであった。

関連してこのことも紹介しておこう。『石見タイムズ』への改題を主導したのは息子の清文だった。清文にあって地方紙の発行は、米軍ハワイ捕虜収容所で所長のオーティス・ケーリ（Otis Cary）と日本の民主化を構想して以来の抱負で、改題は、岡村二一・式場隆三郎らがケーリの指導・助言を受けて創刊した『東京タイムズ』に、題字のロゴを含めてならったものであるという。

清文は1943年に慶大を卒業、海軍中尉として戦艦大和の暗号士官を務め、のちフィリピン戦線に異動、翌44年にルソン島で部下をつれて米軍に投降している。清文は収容所でトーマス・ビソン（Thomas A. Bisson）の論稿「日本改造計画」（1945年7月15日付の雑誌『ネーション』に掲載）を翻訳しつつ日本民主化のシナリオを構想し、地方紙をもって日本の民主化に寄与する決意をケーリとの交流のなかで固めたという（36～38頁）。

なお、清文のルソン島における米軍への投降に関しては本書の第Ⅲ章で詳述している。また投降の経緯についてまとめた本に、永沢道雄『「不戦兵士」と小島清文』（朝日ソノラマ、1995年）があり、清文自身『投降——比島決戦とハワイ収容所』（図書出版社、1979年）を著している。

※

新興紙が隆盛を見たのは、GHQが日本民主化を担うメディアとして優遇した民主革命期であった。新興紙は1948年以降、GHQの政策転換や、戦前以来つづく全国紙・県紙との競争に敗れて2、3年で姿を消している。唯一残っていた『東京タイムズ』も1992年7月31日に廃刊し新興紙の灯は消えた。

『石見タイムズ』で注目されることは、新興紙としては異例の26年間も発行されていた事実である。長期存続の条件・理由はいったい何か。本書に対する評者の問題関心の一つはこの点にあった。

著者は、浜田市域が山陰地方でも相対的に豊かで、ローカル紙を支える経済力＝広告収入があったこと、ドレスメーカー山陰女学院や英語塾の経営、石見都市対抗野球大会や浜田陶芸展の開催など、経営確立に向けたいくたの努力があった（第Ⅰ～Ⅳ章）。また『石見タイムズ』には棟方志功、水谷良一（ペンネーム比木喬）、宮澤俊義ら学者・文化人や、石見在住の知識人が多数寄稿し、文化的で質の高い編集が試みられていた。

しかし『石見タイムズ』が長期に存続した基本条件は、著者によれば、清新かつ客観的な報道と並んで「時代をリードする清友、清文の先進的でリベラルな論調」にこそあったという。本書のまとめとして、著者は『石見タイムズ』が「民主主義、市民の市政参加、男女同権、労働、教育問題などで常に先進的な論調を張ったことが石見地区の人たちに支持されたからである」（「はじめに」）と述べている。

※

本書は、地方紙の原点とは何か、地方紙の使命とは何かについて改めて考察を試みる好個の図書であろう。

近年、地方紙メディアの環境は大きく変化し

ている。少子高齢化、過疎化、活字離れが進行する一方で、大手紙の寡占化、報道・情報紙の無料配布、またIT化の発展によりインターネットも普及している。地方紙メディアは、変容・変貌する現代日本社会にどう対応し、活路を拓くのだろうか。

1947年7月1日付の『石見タイムズ』（第37号）は、社説「改題にのぞみ」を掲載しているが、改めて「民衆のためのよい新聞」「日本の再建のために、社会のよき糧となるのが新しい新聞の使命」（第37号）とその決意を披瀝していた。

また『石見タイムズ』は1950年3月11日付第157号にも「地方紙の意義」と題する社説を掲載し、地方紙の意義について「真の地方の民意を代表することが出来るのは地方新聞のみが、これをよくすることが出来ると同時に、そうすることが地方新聞の任務であり、地方新聞に存在価値がある所以のものである」と述べていた。

事実、『石見タイムズ』は石見地方を代表するメディアとして民主主義の確立と地方文化の発展に努め、また郷土の歴史、伝統、そして文化を共有する生活圏において民衆と一体となってこれを担っていた。著者はこの事実をもって、地方紙としてのあり方と発展の可能性を読者に提示しているのであった。

※

率直に言って本書は読みにくい。ここで読みにくいというのは記述や論点が複雑難解というのではなく、人物や事柄が各章に分散的に紹介され、かつ繰り返しが多くまとまった形で紹介されていない、という意味においてである。

清文のルソン島における米軍への投降については第Ⅳ章を除く各章でばらばらに紹介され、記述も重複している。ケーリとの交流や、清友の経歴、また清友が青年期、大正デモクラシー

期の1913（大正2）年に石見地方で発行した文芸雑誌『心の響』（月刊）についても同様である。

文献引用についても問題があった。原文ママではなく、意識した形で引用されているのである。例をあげよう。著者は、清友について『昭和新聞名家録』（昭和5年発行）によると、『編集出身にして事業的天才』とまで書かれるほどの人物だった」（31頁）と述べている。実際は『編集出身に稀れなる事業家的天才』（永代静雄編『昭和新聞名家録』新聞研究所、1930年12月、360頁）である。

基本事実についても一部に不注意が見られる。たとえば『東京タイムズ』の創刊は、（昭和）二二年二月、『石見タイムズ』の創刊はこれに遅れること五カ月」（30頁）とあるが、『東京タイムズ』の創刊は1946年2月6日のことである。

新興紙は、GHQ占領期に進歩と民主の主張をもって輿論をリードし、また個性豊かな編集

や報道を試みて、日本ジャーナリズムに光彩を放っていた。鳥根県でも『石見タイムズ』に先立って1946年2月に松江市で若槻福義らにより政論紙『嶋根民報』（週刊紙、タブロイド判4頁）が創刊されている。

小島清友・清文父子であれ、あるいは若槻福義であれ、日本の民主化に夢と希望を抱き、高い理想と倫理をもって時代に生きた社会派のジャーナリストについては現在ではほとんど忘れられている。

本書は、埋もれていた社会派のジャーナリストに光を当て、またGHQ占領期に新興紙が日本ジャーナリズムの一翼として戦後民主主義の形成を担ったという事実を発掘・記録している。著者の労を多とし敬意を表したい。

（吉田豊明著『伝説の地方紙「石見タイムズ」——山陰の小都市浜田のもうひとつの戦後史』明石書店、2004年9月刊、233頁、定価2000円）

（よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題研究所兼任 研究員）

●「近現代史における日中関係の再検討」国際シンポジウムの記録
 THE POSSIBILITY OF AN EAST ASIAN COMMUNITY
 Rethinking the Sino-Japanese Relationship

東アジア共同体の可能性——日中関係の再検討

佐藤東洋士・李恩民編——菊判・560頁・8400円(税込)

アジアの双壁として地域統合に多大の貢献をなしうる力を備えている日本と中国は、負の遺産として残された「過去」をどのように克服していくか、東アジア共同体の構築の上での最も重要な課題に挑む!!

【報告者・執筆者】（執筆順）

黄 自進	横山宏章	邢 麗 荃	服部龍二	聞 黎明	植田渥雄
宋 志勇	大澤武司	松金公正	菅沼雲龍	大崎雄二	小崎 眞
太田哲男	町田隆吉	光田明正	石 之瑜	佐藤考一	天児 慧
趙 全勝	ジョン・ホーキンス	ギルバート・ロズマン	ケントE・カルダー		川西重忠
白西紳一郎	王 泰平	中江要介	田島高志	今西淳子	

御茶の水書房 113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
 ホームページ <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>